

広く世界に目を向け、自分らしく生きることが出来る力を身につけ、自他を大切にすることと新しいことにチャレンジする心を育てる。
 ・めざす学校 (○笑顔にあふれ、生き生きと学び合う学校 ○新しいことにチャレンジできる学校 ○生命のあるものへのやさしい心が育つ学校)
 ・めざす子ども (○学習を調整し、粘り強く取り組む子ども ○多様な価値を認め、協調できる子ども ○自他の生命と命、心を大切にすること)
 ・めざす教師 (○豊かな人間性と教育的愛情をもつ教師 ○創造力と受容力を発揮できる教師 ○学校組織の一員としての責任を自覚し、支え会える教師)

I 学校教育目標

II 前年度に残された課題

III 本年度の重点課題

IV 来年度に残された課題

<p>①【児童活動部】本校児童の課題である「投の運動」と「柔軟性」について、授業のウォーミングアップ等を活用し、自分たちで必要な動きを考えて活動する時間を設け、楽しみながら体を動かせる機会を設ける。課題改善に繋がる校内研修に取り組む。</p> <p>②【人権教育部】人権課題について意識して取り組めていなかった。人権課題について考える機会を多くとる。各学年での指導内容について整理して、人権教育のねらいや人権課題について意識して取り組めるように計画を立てていく。</p> <p>③【生活指導部】来年度、生徒指導・人権教育・特別支援の3つが同じ部会として活動していくことを受け、今年度の児童の実態を活かして目標を設定していく。「サイレント掃除」から「考え、感謝する掃除」に移行することを受け、掃除に集中する力を基盤に友達への困り感や学級の課題にも目を向け、「自分がどのように動けばみんなのためになるだろうか」という意識を育てていく。</p> <p>④【研究推進部】来年度の研修テーマを「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」とし、児童に学習を委ねるためには、どのような授業の流れを作るか、どのようなワークシートや学習計画表が有効であるか等を各学年部で共有しながら研修を深める。</p>	<p>①【研究推進部】「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」とし、児童に授業を委ねるためには、どのような授業の流れを作るか、どのようなワークシートや学習計画表が有効であるか等を各学年部で共有しながら研修を深める。</p> <p>②【人権教育部】授業や学校全体の取り組みを通して、互いのよさや違いを認め合う。人権に関する知識や理解を深め、豊かな人間性を育み、人権感覚を養う。</p> <p>③【特別支援教育部】児童の得手不得手、特性について全教員で共通理解をして、サポートすることを心がける。児童が一人一人の違いを認め合い、助け合える児童像を目指す。</p> <p>④【生活指導部】声かけ、賞賛などの「発達支持的生徒指導」や生徒指導上の諸問題の未然防止をねらいとした「課題予防的生徒指導」を心がける。生徒指導事案には組織的対応をとり、複数の目で早期対応を最重要視し対応していく。「サイレント掃除」から「考える掃除」に移行するにあたり、まず自分の掃除に対する取組を振り返り、よりよい掃除の時間にするためにどうすればよいか考えさせる。そして、掃除を通して仲間の頑張りに気づかせ、仲間や場所に感謝できるようにさせたい。</p> <p>⑤【特別活動部】異学年との交流を通して、同じ東小に通う仲間を大切にすることを育てる。</p> <p>⑥【保健体育部】「投の運動」と「柔軟性」について、授業のウォーミングアップや朝の体操等を活用して、楽しみながら体を動かせる機会を設けること</p>	<p>①【研究推進部】個別最適な学びについて、低学年から学びのスタイルが積み重なっていくようにする。また全学年で使用できる指標をつくり、系統立ててやっていく。</p> <p>②【人権教育部】安心できる集団作りをするために、各部と相談しながら、学校全体で人権の取組を計画して進めていく。</p> <p>③【特別支援教育部】一人一人の違いがあることを理解し、互いに認め合える集団作りを全学年で進めていく。</p> <p>④【生活指導部】生徒指導案件が発生した際には、組織的対応ができるように職員間の情報共有を密に行う。また、あいさつや廊下歩行に関して、児童が自ら守れるように教師の働きかけを工夫する。</p> <p>⑤【特別活動部】たてわり活動について、異学年との交流をより濃く誰もが「違う学年と関わるのが楽しい」と感じることができるようたてわりのあり方を再構築していく。</p> <p>⑥【保健体育部】「投の運動」と「柔軟性」について、引き続き各学年で取り組んでいく。経年で体力テスト、児童アンケート等で変容を見る。</p>
---	---	---

「1」(重点課題番号)	[2]具体的達成目標と評価指標		[3]自己評価				[4]外部アンケートの分析				[5]自己評価			[6]学校関係者評価	
	具体的に、何を、いつまでに、どの水準まで、数値化		中間評価		児童生徒アンケート		保護者アンケート		最終評価(成果と課題)		課題の改善策等		評価者人数		
			評価日	8月下旬	実施日	12月上旬	実施日	12月上旬							
	公表日	5月26日	公表日	10月9日	公表日	3月5日	公表日	3月5日	評価日	2月27日	評価日	3月5日	公表日	3月16日	
公表方法	<input type="checkbox"/> ホームページ <input checked="" type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input checked="" type="checkbox"/> ホームページ <input checked="" type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方 <input checked="" type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input checked="" type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input checked="" type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他	公表方法 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 文書配布 <input checked="" type="checkbox"/> 説明会実施 <input type="checkbox"/> その他		
1 研究推進部	<p>○1年かけて自分に合った学習の仕方を学び、年度末には自分に合った学習方法を選べるように育てる。 →児童アンケートから肯定的な意見5割以上を目指す。</p> <p>○自己のめあてを達成するために学び方を提示する。</p> <p>○自分の考えを伝え、交流を通して仲間との学び合いにより、「人との関わり」を大切に授業展開を行う。 →今年度は1年かけて、児童に有効的な学び方や手段を教職員が提示できるようにし、来年度に向けて、基礎固めをしていく。年度末に教職員にもアンケートを取り、振り返る。</p>	A	<p>○「学習方法を選んでいるかどうか」に関しては前向きな反応がある。</p> <p>○「学び方の提示」に関しては、子どもたちの実態に合わせていろいろな学習方法を教師も提示できるように研修を行っている。目指すは、「将来、自分で考え、探求できる大人」へと成長できるように導く。</p> <p>○「人との関わりを大切に授業展開」については、協働的な学びができるように1学期の期間は学級づくりにも重きを置いてきたので、引き続き継続していきたい。</p>	<p>○担任が個別最適な学びと協働的な学びを意識することで、児童にも学びのスタイルが馴染んできた。</p> <p>○児童アンケートでも、個別最適な学びや協働的な学びについて、「できた」という声が多かった。90%以上だった。</p> <p>○課題としては、個別最適な学びをする際に、児童に任せると安心できる人(仲のいい友だち同士)になることも多く、新しい学びにつながらないことがある。そのため、班づくりなどで工夫をした。</p> <p>○低学年で使用していた学習形態(一人・ペア・グループ・全体)がわかりやすかったので、全学年で使用できる指標を系統立ててやっていく。</p>	<p>○「子どもは、自分で考え自分に合った学習の仕方をしようとしている。」については、7割近くが肯定的な意見だった。継続していくことで、参観などでも見てもらう機会が増え、理解が深まると考えられる。</p>	A	<p>○今年度は新しいテーマで1年目の年だったが、職員が思考錯誤しながら全体で取り組むことができた。</p> <p>○協働的な学びという点においては、児童は、クラスの友だちだけでなく、保護者や地域の方などに関わりながら、自分の考えを広げたり深めたりしようとしていた。</p> <p>○課題としては、個別最適な学びをする際に、児童に任せると安心できる人(仲のいい友だち同士)になることも多く、新しい学びにつながらないことがある。</p>	<p>○個別最適な学びの課題について 班づくりなどで学習形態を工夫してきたが、低学年から学びのスタイルが積み重なっていくようにする。また全学年で使用できる指標を系統立ててやっていく必要がある。</p> <p>○また、次年度は個別最適化と協働的な学びが2年目となるので、「子どもの問い」や「自己調整」、「ふり返し」などポイントを絞って、学びの連続性ができるように研修を行えるようにする。児童の学習が6年間積み重ねて力がつくようにしていく。</p>	<p>・全学年で使用できる指標とあるが、個別最適な学びの学び方を系統化システム化していくと、教員も子どもたちも学びに入りやすいと思う。</p> <p>・個別最適な学びについて保護者に理解してもらうために、個別最適な学びに学校としてどうやって取り組んでいくのか文章化、図式化するとよいのではないかと。(個別最適な学びと協働的な学びの一体化の姿を、授業のグランドデザインとして示す)可視化することで、保護者の理解も進むと思う。</p>						

<p>2 人権教育部</p>	<p>○児童の多様性を育むために、教師が率先して、児童のよきや違いを認めていくようにする。 ○ほかほか言葉の指導を行い、日常的にほかほか言葉を意識させる。 ○すべての児童がわかりやすい授業を目指す。 ○すべての児童に活躍の場を与える。 ○ジェンダー平等についての授業を行い、性別に関わらず、すべての人が平等であることを意識させる。 ○児童の情報共有を定例部会で定期的に行い、児童一人ひとりの大切さを理解し、学校の教育活動全体において人権を尊重した指導を行う。 以上の取組から、「自他の大切さ」や「人権の理解」についての児童アンケートを実施する。アンケート結果を活用しながら、教職員が授業を通して子どもたちの人権意識が育っているか自己評価を行う。</p>	<p>A ○「自他の大切さ」について自分の良さや友だちの良さを知るきっかけとなる取組が必要である。普段の学校生活や道徳の授業などから、お互いを知り、周りに困っている人がいたら助けをあげることができない傾向にある。子どもひとり一人が繋がりが安心して過ごせる教室になるような取組が必要である。 ○「人権の理解」ひとり一人違いがあっても良いと答えた割合が全体で高く出た。児童の多様性を育むために、児童のよきや違いを認める声かけを授業や生活の中で取り組んでいる結果が出ている。</p>	<p>○自他の大切さ 「自分の良いところを知っていますか」「友だちの良いところを知っていますか」(低) 自分の良いところを知っていると答えた児童は、7割、友だちの良いところを知っていると答えた児童は、1年生は6～8割となった。低学年では、学校生活に慣れることで精一杯で、振り返る余裕がなく、振り返る時間をとっていきたいと考える。また、自分の良いところを見つけられない児童もいるため、友だちから良いところを見つけようという取組をして、自分の良さを認めるきっかけにしていきたいと考える。 「周りに困っている人がいたら助けられますか。」「自分と同じように、相手のことを大切にしていますか。」「(中)(高) 周りに困っている人がいたら助けると答えた児童は9割を超えた。「自分が困っている時に、友だちや先生に声をかけることができますか」(中)(高) 周りに困っている人がいたら助けると比べると8割と下がる。児童の実態として、自分から困ったときに声をかけにくい児童がいる。 ○人権の理解 「ひとり一人違いがあってもよいと思いますか」(全学年) 低学年では8割、中高学年では9割を超えて、高い数値が出た。</p>	<p>「子どもは、友だちの良さや違いを認め合うことができています。」 「学校は、子どもたちに思いやりの心を持たせ、あたたかい学級づくり・学校づくりに取り組んでいる。」 肯定的な意見が多くを占めた。「わからない」と答えた保護者も8%程度見られたので、学校全体の取組(ほかほか言葉や異学年交流)学校だよりなどで発信していく。</p>	<p>A ○「自他の大切さ」についてアンケート結果・子どもの実態より ・全体的に前向きな意見が多くあった。低学年では、学校生活に慣れることで精一杯で、振り返る余裕がなかったため、道徳の授業などで振り返る時間をとっていきたいと考える。また、自分の良いところを見つけられない児童もいるため、友だちから良いところを見つけてもらう取組をして、自分の良さを認めるきっかけにしたいと考える。 ・子どもの実態として、周りに困っている人がいたら助けると答えた児童が9割を超えていたが、反対に自分が困ったときに声をあげることができない傾向にある。子どもひとり一人が繋がりが安心して過ごせる教室になるような取組が必要である。 ○「人権の理解」についてアンケート結果・子どもの実態より ・ひとり一人違いがあっても良いと答えた割合が全体で高く出た。しかし、子どもたちの実態より、周りと違うことが恥ずかしいと感じたり、周りと違うことをよしとしない様子が見られるときもある。児童の多様性を受け入れる力を育むために、児童のよきや違いを認める声かけを続けていく必要がある。 ○ジェンダー平等について校内研修でジェンダー平等についての学びを深め、児童の実態や学年に応じてどんな授業ができるのか、話し合いを行い計画を立て実践していく。</p>	<p>改善対策 困っていると声をあげられるような集団作り ・特別活動部と連携を行い、たてわり活動での活動を入れる。運動集会での行事は、人権的なめあてに置いて行う。 ・ほかほか言葉の取組を行い、学校の各学年の階段に掲示し、あたたかい言葉が普段から目につくようにする。 ○児童の多様性を受け入れる力を育む取組 ○ジェンダー平等についての取組 ・年間計画を立てる。 ・研修を行う。 ・なのはな児童と各学年で交流する場をもつ。</p>	<p>・東小の子どもは幼稚園児への接し方が優しい。体験活動を通じて関係性が築かれ、小学校に安心できる人がいるということがありがたい。 ・最近の子どもは困ったときに声をあげることができない傾向にある。自分が困っているということを出せるという力は、変動が激しいこの世の中では必要であり大切なことであるので、改善対策に力を入れてほしい。 ・今年度、人権教育部のアンケート項目をいろいろと変えてもらったのが、新しい取組につながったということでもよかったと思う。 ・人権教育部の児童アンケートで、「自分のよいところを知っていますか」という質問項目があるが、「わからない」の回答が7パーセントあり、低学年の子どもたちには理解が難しく、答えにくかったのではないかと思う。今後、子どもたちが考えやすく、答えやすい項目を考えていってほしい。</p>
<p>3 特別支援教育部</p>	<p>○一人一人の得意や不得意があることを理解し、互いを認め合うようにする。 →アンケートを実施して児童の実態を把握し、多くの児童が相互理解をできるように努める。 ○子どもをみつめての研修を通して児童の特性に対する共通理解や支援の方法について考え、特別支援について理解を深める。 →職員の研修後にアンケートをすることで、職員の特別支援に対する理解が深まったか自己評価を行う。</p>	<p>A ○一人一人の得意や不得意があることを理解し、互いを認め合うようにする。 →アンケートを実施して児童の実態を把握し、多くの児童が相互理解をできるように努める。 ○子どもをみつめての研修を通して児童の特性に対する共通理解や支援の方法について考え、特別支援についての理解を深める。 →年に3回行い、共通理解をはかる。</p>	<p>「一人ひとり違いがあってもよいと思いますか。」という質問に対して、全学年の9割の児童が肯定的な意見を答えている。1学期に比べ低学年の児童の肯定的な意見が増えている。学校生活に慣れてきたことやいろいろな児童とせつする機会を持つことで理解が増えてきたと考える。また、各学級での児童理解に対する学習の時間のためと思われる。今後も学年に応じた個々の発達段階の学習の時間の確保が必要とされる。</p>	<p>「子どもは、友だちの良さや違いを認め合うことができています。」に対して肯定的な意見が9割を超えている。ただし、「分からない」や否定的な意見もあるため、今後も学校と家庭で協力して指導していく必要がある。</p>	<p>A 「一人ひとり違いがあってもよいと思いますか。」という質問に対する学年部ごとの差が大きかった。特に低学年部に低い傾向がみられたが、その後のアンケートで数値が上がっていた。そのため、他者をとの違いを認めていくために、低学年から学級での指導をすること、また、指導を継続的にどの学年でも行う必要がある。 学期ごとに子どもをみつめての研修を行い、共通理解を行うことで、教員全員で児童を見て、助けることができるように努めた。また、必要に応じて、終礼等でも情報共有を行っている必要がある。</p>	<p>本年度から配り始めたなのはな教室の説明についてのプリントの配布を継続していくとともに学級での特別支援学級の必要性や過ごし方について必要に応じて話をする。 子どもをみつめての研修を継続していくうえで、特別支援学級だけでなく各学級にも支援が必要な児童がいることを確認して、学校全体で児童の実態を共有することで全ての教員が児童を見守っていくことができるようになる。</p>	<p>・共通理解を図り、特別な支援が必要な児童に対してのきめ細やかな支援を継続して行ってほしい。</p>

<p>4 生活指導</p>	<p>○廊下歩行や安全な過ごし方の声かけをその都度行い、定着を図る。また、夏季休業中に、廊下中央の印を描き直し、右側通行が意識できる環境を整える。 →廊下歩行の約束を守れていない児童が2割ほど存在するので、「約束を守れた」と回答する児童を8割以上にする。 ○より掃除の時間にするために日々の掃除の後には、自分の掃除の取り組み方やがんばりを振り返る。また、児童アンケートで、今自分がどの程度掃除に取り組んでいるかの実態を探る。自分の担当する場所の掃除を考えながら取り組めるようになった上で、友だちのがんばりや存在に気づき、感謝を向けることができるようにしていきたい。 →1学期と2学期の児童アンケートを比べて、「自分の担当場所以外でもできた」「担当場所をすみずみまできれいにそうじをすることができた。」と回答した児童の割合を増やす。 ○定例部会で各学年の事象を共有することで各学年の様子を全体で把握できるようにする。事象が発生した際には管理職・生指と共有して対応していくようにする。 →月に一度の部会で情報共有する。</p>	<p>A</p> <p>○廊下歩行・右側通行 どの学年も一定数ルールを守れていない児童が存在する。また、守れている児童も教師からの声かけでなんとか守れている児童もいる。理由を見ていくと、「急いでいた」や「友達と広がり歩いてた」などの回答が多く見られる。 これらことから、時間にゆとりを持って行動させること、どうして廊下歩行をしないといけないかを考えさせる指導が必要だと考えさる。 ・全職員で廊下を歩くように指導する。(特に階段の昇り降り) ・時間にゆとりを持って行動させる。 ・どうして廊下を歩かないといけないかを考えさせる。(自分や周りの安全を守るため)</p> <p>○生活目標 生活目標を放送委員会の放送や昨年度より昇降口にも掲示している成果もあり、意識できている児童も多いが、失念してしまう児童はどの学年もいる。教師が日々の指導の中で意識して指導していく必要がある。 ・今年度放送による啓発 ・週に1度くらい各担任による啓発&振り返り</p> <p>○考えるそうじ どの学年も前向きに頑張れている。そうじの仕方を振り返ることで、創意工夫やもっとがなばりたいという前向きな気持ちが生まれている。 ・子どもたちが自分の頑張りに気付けるように振り返りを大切にしていきたい。</p> <p>○あいさつ どの学年もあいさつができていた児童は多い。しかし、学年にもよるがあいさつを自分からできる児童はそこまで多くない。 ・あいさつすることの良さというのを考えさせる。 ・あいさつの素晴らしい子を価値づけしていく。 ○生活のやくそく 多くの子どもたちは約束を意識して過ごしている。統一した指導ができるように教師もしっかり目を通しておく。 ・約束の紙を目につきやすいところに貼っておく。</p>	<p>○廊下歩行 どの学年も8割ほどの児童が廊下歩行のルールを守れている。廊下歩行ができていない児童の理由を見ると、「急いでいた」と回答している割合が多い。トイレに行く際やカギを取りに行く際に走っている姿が見られる。2学期から職員室に鍵を戻すことになったことから歩かないといけないとは思いつつも急ぐあまり走っていると考えられる。</p> <p>○生活目標 生活目標を意識できている児童も多い。日々の生活の中で意識できていない児童もいるので、教師が日々の指導の中で意識して指導していく必要がある。</p> <p>○考えるそうじ どの学年も前向きに頑張れている。まず、自分の掃除場所について考えて掃除ができていた。高学年になるにつれて自分の場所だけではなく、ほかの場所にも目を向けて仲間と声を掛け合い、そうじをすることができている。</p> <p>○あいさつ あいさつは学年によって実態が様々である。児童のあいさつが自然に増えるような環境をつくる。</p> <p>○生活のやくそく 多くの子どもたちは約束を意識して過ごしている。統一した指導ができるように教師もしっかり目を通しておく。</p>	<p>○生活のルール 多くの保護者の方は自分の子どもはルールを守って行動できていると回答している。ルールを守る大切さというのは学校と家庭と力を合わせて教えていくものだと思う。今度も家庭と連携しながら、ルールを守れる子どもたちを育てていきたい。</p> <p>○あいさつ 子どもがあいさつをしっかきできていないと感じている保護者の方が少なからずいる。あいさつはコミュニケーションの第一歩となるものであるので、児童にあいさつの意図の説明やあいさつをしてよかったという経験を多く積ませたい。</p>	<p>A</p>	<p>○今年度からそうじの仕方を見直し、新しく「考えるそうじ」として、言われたところをきれいにするだけではなく、どうすればよいかを考えてそうじするように啓発した。掃除の内容に自分自身の裁量があるということで、主体的に取り組もうとする児童の姿が多く見られた。来年度以降は、今年度磨いた掃除のアイデアをもとに、友だちと協力してよりよく掃除できるようにしていきたい。</p> <p>○廊下歩行は多くの児童が歩こうと意識しているが、教室に戻るときや休み時間に運動場に行くときなど急いでいるときにはつい走ってしまう児童の姿が見られる。廊下歩行の大切さについては何度も伝えられているので理解はしているはずである。</p> <p>○どの学年もあいさつをする児童は多いが、受け身であったり、形式的にただしているだけで、児童が自然とあいさつをするような環境づくりに努める必要がある。</p> <p>○生活目標は今年度から生活指導、人権、特別支援の視点を入れて作成した。集団作りの点からもいろいろな視点で目標を作成したのはよかった。生活目標の掲示が飾りにならないようにその都度振り返るようにしたい。</p> <p>○毎回の定例部会で情報共有はできた。しかし、各事象の共有を口頭ではできなかったが、文書としてあまり残していない。もれのない引き継ぎを行うためにも引き継ぐべき事象に関しては文書で残すようにしていきたい。</p>	<p>あいさつ ①どうして、あいさつが大切か伝える ②教師の目線と表情を意識する。目を合わせるとあいさつをしやすい。また、表情が明るい相手にはあいさつもしやすいし、児童もあいさつをしてみようという気持ちにならると考える。 ③教師のあいさつの返し方や声のかけ方を少し豊かにする。「おはようございます。」というあいさつは聞こえがいいが距離が出やすいので、「ございます」をつけないパターンやブラスー言をつけたパターンを意図的に盛り込む。自分に対して興味を持ってくれた人に対しては心を開きやすい。気にかけてくれている人には、また話しかけたいという思いにつながるかと考える。 廊下歩行 ①廊下をどうして歩かないといけないかを考えさせる。また、足音にも意識させたい。 ②どうして走ってしまうのかを児童と考える。走ってしまうのは児童なりの理由があり、それを共感したうえで走ることでもどんな危険があるかを考える。 ③走っている児童を見かけたら、まず止める。叱るのではなく淡々と。そして、歩くように声をかける。 ④廊下歩行ができていた児童を見かけたら認める。 ⑤教師もゆとりを持って歩く。 ⑥教室移動の際には整列し移動する。(専科、体育)※中休みの場合は並ばずに戻ってもいい。年度初めは教師が先導し、正しく廊下を歩けるように指導する。ある程度教師の声かけがなくても自分たちで廊下歩行ができるようになったら後ろから声かけをするなど段階的に手を放していく。</p>	<p>・来年度に残された課題として「自主的な挨拶の指導」が課題として挙げられているが、昨今の情勢として事件に巻き込まれることを防ぐといった観点から、大人に対して挨拶がしにくいという子どももいると思うので、その子の気持ちを考えると課題としては挙げるのは難しいところあるのではないかと。 ・こちらの温かい気持ちが変わったから、子どもたちも挨拶が返しやすいのではないかと。大人が、挨拶に温かい言葉がけを足すということが大切だと思う。</p>
<p>5 特別活動部</p>	<p>○縦割り活動を通して温かい思いやりの心を育てるとともに、豊かな人間関係を育てる。 ○学校行事(運動会、音楽会等)に対して全校児童一人一人が力を出し合って取り組む喜びを味わえるようにする。 ○「みんなががんばっているから自分も頑張ろう」「仲間のためにやってみよう」とする自主的、実践的な態度を育てる。 →各活動で児童に振り返りを行っているので、それをもって達成の指標とする</p>	<p>A</p> <p>○4回のたてわり活動を行った。異学年での交流を下級生に対して、声をかけたり、手を差し伸べたりしている場面がどの班でも見られた。運動会や音楽会の活動後にアンケートや振り返りを行い、仲間との関わりから、どのようにあたたかい心が育っているか、みとりたい。</p>	<p>運動会や音楽会の活動後、異学年で感想交流会を行った。児童の感想からは、「応援があつて頑張れた」「みんなで頑張ってた」「きれいな歌声だった」「高学年の楽器の演奏がすごかった」などが挙げられた。お互いの頑張りを認めあう心が見られた。</p>	<p>9割以上の保護者が「学校は異学年との交流を深めている」に肯定的な回答をしていた。しかし、それは特に学校行事(運動会・音楽会)だけが取り上げられている気がする。否定的な回答については、運動が苦手だったから運動会や音楽会を楽しめなかった児童の声が反映されたのではないかと感じている。たてわり活動も更に更新して遊んで保護者の方にも毎月の異学年交流を知ってもらおうようにしていきたい。</p>	<p>A</p>	<p>たてわり活動をはじめ、運動会、音楽会などの行事でお互いの良さを知ることができたり、一生懸命力を発揮することの良さを知れたり、子どもたちの思いやりの心や自主的な態度がおおむね育った様に見える。</p> <p>現実的に話し合いをしていく時間をとることができるかは厳しいが、できる限り子供との対話を大切に異学年との交流を計画していきたい。</p>	<p>・なばた幼稚園の給食体験で5年生が面倒をみていたが、異学年の子どもと関わるという経験が、相手を思いやる気持ちを育てるという点でよいと思う。 ・たてわり活動でやらされている感がある児童とあるが、班をまとめる点で6年生が負担に感じているということも考えられるのではないかと。 ・子どもたちが、自主的にたてわり班の遊びの内容を考えることで、たてわり活動もやらされている感が減り、活性化されると思う。</p>	

	<p>○朝の体操の年間計画を作成し、「投の運動」および「柔軟性」についての動きにアプローチできるようにする。 →来年度の体力テストの投の結果に有意に差があるか見る。 ○朝の運動タイムを年間5回実施し、各学年で取り組むことで、体を動かすことへの関心を高め、運動集会の参加意欲につなげる。 →アンケート結果の有意差を見る。 ○仲間と楽しく体を動かすことができるように、各学級で外遊びや運動集会への参加を促す。 →全ての学年において前年度より「楽しい」と回答する児童の割合が減っているが、有意な差は見られない。また、本年度が有意に減少している結論付けることは難しく、「楽しい」と感じる児童の変容を見るためには経年で見ていく必要がある。本年度だけを見れば「楽しい」「体育でできることが増えた」と答えた児童の割合は90%を超えている(令和6年度目標より、両指標が90%を超えることを目標に掲げている)。 2024年度奈良県の「統計分析結果」より「運動やスポーツをすることは好きか」という問いに「大好き」「わりと好き」と回答した児童の割合は84.86%である。本校の児童が「楽しい」「どちらかというと楽しい」と答えた児童の割合は94.20%である。このことから、本校児童は、統計結果と比べて、運動を楽しく感じている児童の割合が高い。 ○朝の運動タイムを年間5回実施し、各学年で取り組むことで、体を動かすことへの関心を高め、運動集会の参加意欲につなげる。 →毎日、週に3・4日動かしたと答えた児童の割合は全学年で低下した。全体としては4.3%低下しており、1学期末の書きが1つめの要因とも考えられるが、そう結論付けるための根拠はないが、朝の運動タイムが体を動かす意欲につながっているとは言いがたい。経年で観察することで、変化量が見られるか確認が必要であると考える。もし、気温が関係しているのであれば、夏場に児童が活動できる場を設けることも検討したい。 ○朝の体操の年間計画を作成し、「投の運動」および「柔軟性」についての動きにアプローチできるようにする。 →ボール投げを「楽しくない」と回答する児童は高学年が16.9%で、低学年・中学年それぞれ2倍以上の値、朝のたいそうのストレッチについて「できなかった」と回答する児童は、高学年が13.1%で低学年・中学年それぞれ3倍以上の値の違いがあった。高学年になり、ためらいや恥じらいがあることが考えられる。全員で取り組める投運動の提案をしたい。また、朝の体操の意義や有用さを感じさせたい。 ○学習活動カードを活用して、自分の運動技能の伸長に着目できるようにする。 →各学年の取り組みにおいて体育カードを取り入れ、ロードマップを取り入れるなどしている。また、「体育の勉強でできることや上手になったことが増えたか」という質問に対して「どちらかというとできなかった」と回答した児童が低学年で12.9%であり、これは中学年や高学年の2倍以上の値である。また令和6年度の2年生の「どちらかというとできなかった」「できなかった」と回答した児童の割合が25%であるのに対し、本年度の3年生(令和6年度の2年生)は3.6%と減少している。また、令和6年度においても低学年の「どちらかというとできなかった」「できなかった」と回答した児童の割合が19.5%と他学年と有意に差がある。低学年特有の傾向であるようにも考えられるが、そうかどうか結論付けるために経年観察が必要である。またこの割合が高い理由として、児童が実感を得られていないと考えられるならば、低学年の反省にあるように、達成感を得られる取り組みを引き続き考えて、自分の運動技能の伸長に着目できるようにしていきたい。</p>	<p>○仲間と楽しく体を動かすことができるように、各学級で外遊びや運動集会への参加を促す。 →全ての学年において前年度より「楽しい」と回答する児童の割合が減っているが、有意な差は見られない。また、本年度が有意に減少している結論付けることは難しく、「楽しい」と感じる児童の変容を見るためには経年で見ていく必要がある。本年度だけを見れば「楽しい」「体育でできることが増えた」と答えた児童の割合は90%を超えている(令和6年度目標より、両指標が90%を超えることを目標に掲げている)。 2024年度奈良県の「統計分析結果」より「運動やスポーツをすることは好きか」という問いに「大好き」「わりと好き」と回答した児童の割合は84.86%である。本校の児童が「楽しい」「どちらかというと楽しい」と答えた児童の割合は94.20%である。このことから、本校児童は、統計結果と比べて、運動を楽しく感じている児童の割合が高い。 ○朝の運動タイムを年間5回実施し、各学年で取り組むことで、体を動かすことへの関心を高め、運動集会の参加意欲につなげる。 →毎日、週に3・4日動かしたと答えた児童の割合は全学年で低下した。全体としては4.3%低下しており、1学期末の書きが1つめの要因とも考えられるが、そう結論付けるための根拠はないが、朝の運動タイムが体を動かす意欲につながっているとは言いがたい。経年で観察することで、変化量が見られるか確認が必要であると考える。もし、気温が関係しているのであれば、夏場に児童が活動できる場を設けることも検討したい。 ○朝の体操の年間計画を作成し、「投の運動」および「柔軟性」についての動きにアプローチできるようにする。 →ボール投げを「楽しくない」と回答する児童は高学年が16.9%で、低学年・中学年それぞれ2倍以上の値、朝のたいそうのストレッチについて「できなかった」と回答する児童は、高学年が13.1%で低学年・中学年それぞれ3倍以上の値の違いがあった。高学年になり、ためらいや恥じらいがあることが考えられる。全員で取り組める投運動の提案をしたい。また、朝の体操の意義や有用さを感じさせたい。 ○学習活動カードを活用して、自分の運動技能の伸長に着目できるようにする。 →各学年の取り組みにおいて体育カードを取り入れ、ロードマップを取り入れるなどしている。また、「体育の勉強でできることや上手になったことが増えたか」という質問に対して「どちらかというとできなかった」と回答した児童が低学年で12.9%であり、これは中学年や高学年の2倍以上の値である。また令和6年度の2年生の「どちらかというとできなかった」「できなかった」と回答した児童の割合が25%であるのに対し、本年度の3年生(令和6年度の2年生)は3.6%と減少している。また、令和6年度においても低学年の「どちらかというとできなかった」「できなかった」と回答した児童の割合が19.5%と他学年と有意に差がある。低学年特有の傾向であるようにも考えられるが、そうかどうか結論付けるために経年観察が必要である。またこの割合が高い理由として、児童が実感を得られていないと考えられるならば、低学年の反省にあるように、達成感を得られる取り組みを引き続き考えて、自分の運動技能の伸長に着目できるようにしていきたい。</p>	<p>「学校は、体育の学習や運動タイム、行事等を通して、子どもの体力向上に取り組んでいる。」の質問は肯定的な意見が9割で、今後同様に家庭と連携して運動会等の行事で児童の成果を周知していきたい。</p>	<p>朝の運動から「投の動き」「柔軟性」にアプローチすることができた。来年度の体力テストで結果を見ていきたい。 児童がより楽しんで投げる運動ができるように高まったとは言えないが、例年通りの関心意欲は保てた。学習活動カードを各学年で取り組んだおかげで自分の運動技能の伸長に目を向けさせる仕組みを作れたので、来年度以降も継続していきたい。</p>	<p>投運動へのアプローチが思っていたよりできなかった。 児童がより楽しんで投げる運動ができるように授業内容や行事を精選して取り組ませていきたい。来年度は運動会や水泳学習において変更点があるので、児童の学習が例年以上のものにできるようにしていきたい。</p>	<p>・気候が変わってきており、熱中症の懸念から、例年通りの日程でプール学習を組むとほとんどプールに入ることができないのではないか。このことも踏まえてプール学習の計画を立てていってほしい。 ・保健体育部の具体的達成目標と評価指標のところでは有意差をみるとあるが、分析のところでは有意差について言及されておらず整合性が見られないので、統一した分析が必要であると思う。 ・分析をする際に、何パーセントを有意差とするのか明示するとのではないか。</p>
--	---	--	--	---	---	---